

Save The Tropical Forests

ワニ

森の通信

43

1997.3.25



"Sarawak"

photo. R. TOMGE

H u t a n

- 3 【特別寄稿】熱帯林保護運動のゆくえ。大西裕子(弁護士)
- 5 ウータン 97年活動方針〜10年目を迎えて。事務局長 西岡良夫
- 6 関西熱帯木材使用削減委のアンケートと課題。西岡良夫
- 8 「熱帯林を考える」最終回。猪俣栄一
- 11 連載② カダの森林地帯と先住民の村を訪ねて。黒田洋一(JATAN)
- 13 山からの便り「熊野から」春の編。中村義明
- 17 つくり手からの家具のお話 [その4]。永田健一(家具製作)
- 18 ウータンへのお便りから紹介
- 19 会計報告 他

【ウータン活動報告】

- 96・12・8 ウータンとよなか連続講座「くらしの中の熱帯林〜家具」
講師/奥村知亜子、永田健一(ウータン)
- 12・14 出前講座「熱帯林を守ることは地球を守ること？」
くずは公民館/西岡良夫
- 12・24 ウータン42号発送
- 12・24 関西熱帯木材使用削減委員会(以下削減委と略)・自治体部会
- 97・1・8 削減委・全体会議
- 1・18 削減委、サラワク・キャンペーン委員会と打合せ
- 1・26 ★ウータン総会★ゲスト講演・猪俣栄一さん
- 1・27 ウータン、削減委「海はだれのもの・森はだれのもの」集会打合せ
- 1・29 削減委・家具部会
- 2・1 削減委・家具部会の荒木ほか天竜ウッドワークへ調査
- 2・3 削減委、「全国の熱帯木材等使用削減に関するアンケート」回答を記者会見
- 2・8 地球環境ネットワーク関西、第5回学習会へ参加
- 2・17 削減委・自治体部会
- 2・21 削減委・自治体部会の西岡が静岡合板連合会等へ調査
- 2・22 削減委、サラワク・キャンペーン委らの「全国会議」打合せに参加
- 2・23 削減委・全体会議、学習会/ドイツの環境政策/講師・三国千秋さん



●布にくるまる女の子

サラワク最奥の村の一つロングガンは、サラワクで唯一伐採を中止させた村。そこに至るまでには数多くの村人の抵抗と逮捕を経なければならなかった。ところが、父親が逮捕されても少女たちは案外平気だ ― すぐに戻ってくるもん。そしてまた闘うんだから。不正に対して闘い続けること。少女たちはそれを当たり前のこととして捉えている。

◆ 知っている人は知っている 毎度、おなじみの一峠 峠 隆一氏 [環境ライター]

熱帯林保護運動のゆくえ

熱帯林の将来

〔弁護士〕大西裕子



◇地球サミット後の熱帯林運動

1980年後半から90年代の初めにかけて、日本国内だけではなく、ヨーロッパ、アメリカ、カナダ、オーストラリア等においても熱帯林保護の機運は大いに盛り上がりを見せた。

しかし、1992年6月の地球サミットが終わって以降、国内ではマスコミのこの問題に対する関心が急速弱まったのは事実である。ただ、そうした傾向は決して日本に特有なことではなかったようで、私が1993年7月から95年8月まで滞在したロンドンでは、いわゆるクオリティ紙（日刊紙で、事実報道を主眼の置く新聞を指す）に熱帯林問題が大きく報道されたことは殆どない。唯一、東チモールの独立運動に対する弾圧問題についての特集があった。

むろんEU諸国特に、オランダ、ドイツ等において、「持続可能な森林経営から生産されたもの」に限って市場に出すという政策は取られたようではあるが。もともとEU全体の熱帯材消費量がほぼ日本のそれに匹敵する（1985年時点）という程度であるから、特に古いものを大事にするイギリスでは、国内の熱帯材消費をさほど問題にする必要がないせいもあるのだろう。

◇日本のスタンスは大きく変わったか

こうした中で、ウータンが数年来行ってきた自治体キャンペーンは、その地道さもさることながら、活動の派手さに流

されない草の根NGOの真価を発揮したものであったと思う。自治体キャンペーンによって、当初、まったく問題意識すら持っていなかった自治体が、中針葉樹合板の採用、プレキャスト工法などへの移行に目を向け始めたのは大きな成果ではあった。しかし、これで、熱帯林は保全されているのかと言うと問題はそう単純ではない。

日本の木材自給率は、22%台に落ちているし、熱帯材の輸入量もいわゆる南洋材は後記のとおり、資源枯渇あるいは価格高騰の結果若干減少してはいるが、他の地域（赤道アフリカ等）からの増加を加えると実際にはこの10年間多少増えることはあっても減少傾向とはとても言えないのである。

即ち、木材消費そのものを削減する方向が打ち出されない限り、熱帯材であれ、北米北洋材であれわが国の消費に他国の森林が伐採されるという状況は今後も続く。現に、カナダのブリティッシュコロンビア、アルバータの両州で、アメリカのオレゴン州で、オーストラリアのタスマニア州で、ロシアのシベリア地域で、森林伐採を巡ってさまざまな問題が起こっている。

◇熱帯林問題の根はもっと深い

現在、わが国の国家赤字は、450兆円とも言われている。

こうした財政赤字を抱えながら、

住専問題、金融不安、非過熱製剤をめぐる厚生省に代表される官僚主義、高級官僚の汚職等が次々と明らかになることによってようやく着手されることになった行財革が、ふたを開けてみれば、わが国の貿易依存型経済構造、土建業中心の産業構造を、なんら転換することなく、それどころか、向こう10年間で、更に総額630兆円もの（自然破壊型大規模）公共工事を行うことになった。

しかし、わが国では、統計的数字ではいまだに森林率60数%となつてはいるが、現実には、長年にわたって行われてきた杉、ひのきの単一造林、ゴルフ場、スキー場等のリゾート開発、大型林道開発などによって、各地で深刻な破壊や荒廃が進んでいる。それによって、生息地を奪われた大型鳥獣を初めとして、脊椎動物だけをとっても、1199種中283種が絶滅の危機にあるといわれている。にもかかわらず、最近、「景気回復」と「規制緩和」を錦の御旗に、さらに開発規制をゆるめ、ミニバブルの再来をもたらそうとの動きがある。

このような現実を見るにつけ、熱帯林保護問題は日本の経済構造等の一側面に過ぎず、その部分だけを取り出して、いくら伸ばしたり、縮めたりしても、根本的な解決に至りはしないとの思いが正直言っていないではない。

◇熱帯林生産国の状況は変わったか

熱帯林保有国、特にマレーシア、インドネシア、ブラジルは、1992年の地球サミットの折に、自国の資源に対する主権や、開発の権利を強硬に主張して、生物多様性条約にもその趣旨を盛り込ませ、また森林の保護については法的拘束力のない「原則声明」にとどませた。

その姿勢は現在も殆ど変化してはいない。その結果、森林伐採のスピードは資源の枯渇地（サラワク州からの輸入量が

最近減少しているのはそのためと言われている）以外では殆ど減少していない。

1985年に丸太については全面禁輸にしたインドネシアでも92年には再び輸出が解禁となっている。また、わが国の熱帯木材輸入先としては東南アジア地域の熱帯材価格が環境問題によって高騰したことを背景に、アフリカ地域（ガボン、カメルーン、赤道ギニア）からの輸入が急速に拡大している。

またサラワクに代表されるように、伐採された跡地について、早生樹種ではなく、本来の生態系を回復するような植林活動は殆ど進んではいない。

◇熱帯林保護運動の理想と現実

欧米のNGOのように、潤沢な資金力に支えられて、多くの専従スタッフ（科学者法律家を含む）を要することができるのであれば、熱帯林問題だけではなく、他のさまざまな環境問題を取り込み、更にその根幹にある、政治、経済構造などの本質部分い切り込み、あるいは政治家へのいわゆるロビー活動を通じて、この国の環境政策へ直接に影響を与える活動を展開するべきである。そうでなければ、いったん目に見えたと思った成果が、実際は、問題をそこに閉じ込めてしまうことに利用されたり、まるで目眩ましのようにその問題を一時的に他へ転化するにすぎなかったりするからである。

しかしながら、仮にそのような包括的で大規模な活動ができなくても、ウータンみたいに、

①その悩みを抱えながら、

②少ないスタッフを駆使しながら、

③新しい問題を横目でとらえながら、あくまで、身丈に合った活動に焦点を絞っていくのも、案外日本的なスタイルで健全なのではないか、と思うことにしている。

あ～あ、とはいえ、体が3つぐらい欲しいですねえ、みなさん。

ウータン97年活動方針～10年目を迎えて

事務局長・西岡良夫

◆とうとう今年6月で10年目になる。今年4月7日からCSD（持続可能な開発委員会）が開かれ、6月の国連総会の前で21世紀における森林問題の今後の計画を決める報告がされ、12月に京都でCOP3（温暖化条約締結国会議）が開かれるという極めて大事な年になる。今年の総会は、今までの報告と今年の方針案、猪俣栄一さんの講演という盛り沢山のものだった。

大阪府下の自治体熱帯材使用削減キャンペーンは、45自治体のうち30自治体が削減策を行い、第2ラウンドが終わった。今度は第3ラウンドで、熱帯材を含め木材使用の総量削減と家具キャンペーンだ。

その他に企業へのアタックと、全国的な交流、スタッフの強化、新規物品の販売、政策提言等が課題だ。ウータンの主な活動方針は、下の通り。

☆☆☆☆☆主な方針☆☆☆☆☆

1、自治体キャンペーン

- ①大阪府下各自治体へ4月22日にアンケート発送、内容は(a)コンパネ使用量把握、(b)総量削減の方針の有無、(c)環境基本計画の有無、(d)長持ちする建築工法有無 (e)家具リサイクルの促進の有無、(f)エコハウス・省エネ化の有無など
- ②国産間伐材の使用の意志が有るかヒアリング
- ③できたら環境月間(6月)にまとめ、発表、交渉

2、家具の調査とキャンペーン

- ①関西熱帯木材使用削減委員会・家具部会中心に家具リサイクル、リフォーム調査
- ②ウータンで、自治体へ家具リサイクル等を進めるように交渉

3、企業ヒアリング、アンケートー削減委中心に

4、国産材家具・住宅、長持ちする建築工法・建築物の調査ー削減委中心に

5、熱帯材・ロシア材の使用量、破壊の調査ー削減委中心

6、枝打族

- ①プレ・イベント下草刈りー6月末？
- ②本番・枝打ー8月末予定

7、広報・啓発・販売

- ①リーフレット第3版発行、
- ②出前講座ー昨年より増やすようにPR
- ③写真ポストカード作成と販売
- ④Tシャツやウータンのオリジナルグッズの販売

8、スタッフの強化

- ①事務局と会員募集
- ②4月の大学入学式等で募集

9、CSDや国連総会前の国際的流れに、他の団体と案を提言

10、熱帯林連続講座(3月から5月)と10周年イベント

11、予算ー催しが多いのでポストカードなどで販売強化

関西熱帯木材使用削減委のアンケートと課題

西岡良夫

《5年前に比べ1.6倍増加、全国160自治体が熱帯材削減!》

96年4月、関西の全自治体(滋賀、和歌山県の町村除く)に「熱帯木材使用削減等のアンケート」を送り、関西自治体の状況を把握(回答率81%)し、9月12日に「全国の熱帯木材等使用削減に関するアンケート」を全国の都道府県、県庁所在地都市、政令指定都市に依頼。

全国アンケートの回答率は89%であったが、都道府県は県下自治体の動向をほとんど把握できておらず、県下自治体へ指導しているのは8自治体のみ。また企業等に働きかけている都道府県は約1/3しかなかった。なお、削減策をとっている自治体は、大半が針葉樹合板や複合合板に代替したもので、ただ単なる代替ではダメだ。民間を含め型枠合板の約4割が針葉樹合板等であり、その63%がロシアの原生林破壊による合板であるためだ。

ただりオ・サミットの時、大阪府、東京都など10自治体しか熱帯材使用削減施策を取っていなかったのに、全国160自治体で削減策が取られ、熱帯林保護の意識が定着した。これは、熱帯林保護運動の高まりと熱帯材不足の将来を考慮したためと思われる。

《総量削減と、生態系破壊考慮や先住民の生活を考慮の環境基本計画が絶対必要!》

環境基本計画を定めている自治体は、熊本市、福岡県、北九州市、徳島県、愛媛県、松江市、岐阜県、静岡市、横浜市、川崎市、埼玉県、千葉県、千葉市、山形市となっており、関西では大阪市など。現在計画策定中の自治体が大半である。策定中自治体には、熱帯材削減を含めた各項目の総量削減が望まれる。環境基本計画を定め、熱帯木材の総量削減策の実施を盛り込んだ自治体は千葉市のみ。今後他の自治体の施策内容変更を期待したい。




また、熱帯材使用の際に、生態系破壊しない、先住民へ脅威を与えない場合のみ利用とするヨーロッパ自治体施策のように、環境に配慮した自治体はない。検討中の自治体は、環境配慮型の環境基本計画の立案が望まれる。そのためにも、まず各自治体は型枠材の総量把握と県下自治体と企業へ指導が必要だ。

★全国の熱帯木材等使用削減に関するアンケート回答内訳(74回答/83自治体に発送)★

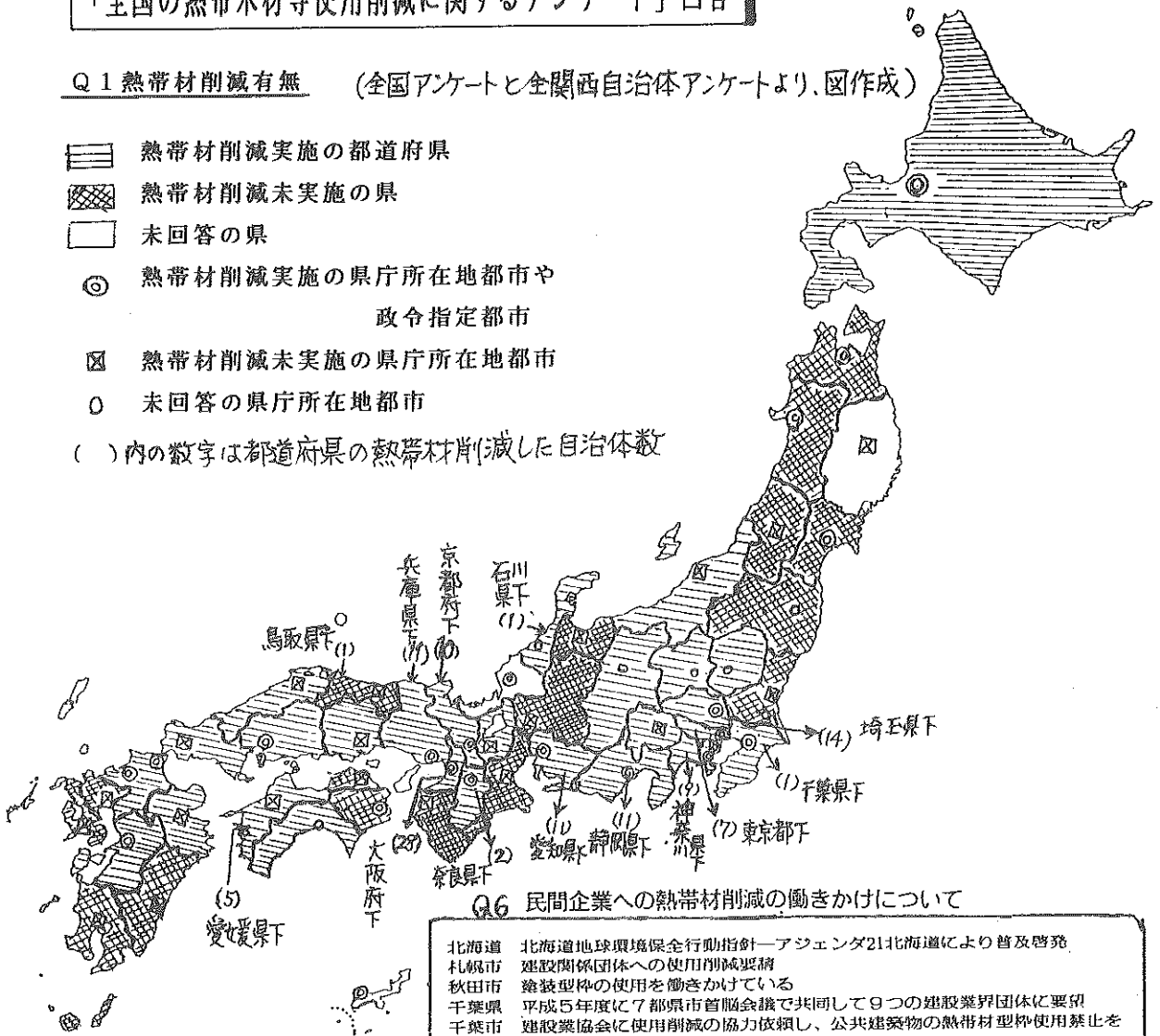
- Q1) 熱帯材削減有りの自治体 39/74(52.7%)
- Q2 b) 削減有・部局間会議有 19/40(47.5%), Q2 c) 削減目標・年度有 8/38(21.1%)
- Q3) 未削減自治体・検討有 10/35(28.6%)
- Q4) 合板使用量の把握有 21/74(28.4%)
- Q5 a) 熱帯林保護啓発有 24/71(33.8%), Q5 b) 熱帯林団体へ支援 6/70(8.6%)
- Q6) 企業への働きかけ有 24/73(32.9%)
- Q7) 県下自治体へ働きかけ有 8/41(19.5%)
- Q8) 県下自治体削減数把握有 4/48(8.3%), Q9) 樹種・産地の把握有 6/31(19.4%)
- Q10) 地元産材使用住宅へ補助 26/72(36.1%)
- Q11) 国産木製学校家具使用有 18/70(25.7%)
- Q12 a) 家具再利用事業有 16/70(22.9%), Q12 b) 廃材再利用事業有 10/68(14.7%)
- Q13) 環境基本計画実施有 14/73(19.2%), 同検討中 49/72(67.1%)
- Q14 a) 基本計画に熱帯材削減有 9/13(69.2%), Q14b) 基本計画に廃材利用策有 5/13(38.5%)
- Q14 c) 基本計画に環境監査有 6/13(46.2%),
- Q15a) 環境基本計画に熱帯材削減策有で・熱帯材の総量削減策有 千葉市のみ 1/8(12.5%)
- 15b) 環境基本計画に熱帯材削減策有で・材は生態系、住民生活考慮の上で使用 0/7(0%)
- 15c) 環境基本計画に熱帯材削減策有で・タイガ等原生林の破壊防止方針有 0/7(0%)
- 15d) 環境基本計画に熱帯材削減策有で・原材料使用、再利用、廃棄まで計画有 0/7(0%)

「全国の熱帯木材等使用削減に関するアンケート」回答

Q1 熱帯材削減有無 (全国アンケートと全関西自治体アンケートより、図作成)

-  熱帯材削減実施の都道府県
-  熱帯材削減未実施の県
-  未回答の県
- ◎ 熱帯材削減実施の県庁所在地都市や
政令指定都市
- ☒ 熱帯材削減未実施の県庁所在地都市
- 未回答の県庁所在地都市

()内の数字は都道府県の熱帯材削減した自治体数



なお、未回答の福井県は、93年に削減実施済である

Q6 民間企業への熱帯材削減の働きかけについて

- 北海道** 北海道地球環境保全行動指針—アジェンダ21北海道により普及啓発建設関係団体への使用削減要請
- 札幌市** 塗装型枠の使用を働きかけている
- 秋田市** 平成5年度に7都県市首脳会議で共同して9つの建設業界団体に要請
- 千葉県** 建設業協会に使用削減の協力依頼し、公共建築物の熱帯材型枠使用禁止を指導
- 千葉市** 平成4年度に建設業協会へ使用抑制を協力依頼
- 前和市** 建設業界、合板製造メーカー等に対し文書による協力要請
- 東京都** 県建設業協会に熱帯材使用削減について協力を要請
- 神奈川県** 県内の主な建設関係団体に型枠、下地材、内装材に削減を協力要請
- 川崎市** 複合合板使用、設計上の配慮などの働きかけ検討中
- 山梨県** 建設業界等に使用削減の協力要請と廃棄合板リサイクルの協力
- 長野県** 営繕課が鋼製型枠使用を推奨する形で発注している
- 新潟県** 平成4年に使用抑制方針策定し、建設業界へ抑制要請
- 石川県** 発注工事設計にあわせて使用削減。モデル工事も実施し、民間建設事業について建設業界団体への使用抑制を要請
- 福井市** 平成8年に(10)静岡県建設業団体連合会等の団体を通して取り組みを依頼
- 静岡県** 平成4年度に県内建設団体に対し使用削減を要請、建設業界の研修会等において使用削減の啓発等を行っている、設計者にも働きかけている
- 愛知県** 建設発生木材リサイクルの推進
- 岡山県** 合板型枠の使用合理化、代替合板・工法の開発・利用、国産材の利用
- 広島県** 建設業協会に対し文書等による要請を検討中
- 広島市** 工事特記仕様書に県内産資材を積極的に使用することを明示
- 島根県** 一部の課で業界の会合に出席した際、口頭で働きかけている
- 徳島市** 県工事は特記仕様書で優先的に複合合板使用としているが、民間企業施工は働きかけを実施していない
- 高知県** 熱帯材の使用削減要請を文書にて通知
- 福岡市** 普及・啓発のためのリーフレットを作成している
- 熊本県** 施工管理において指導を行っている
- 熊本市** 「大分県地球環境保全行動計画」の普及
- 大分県** 営繕工事において、請負業者に協力要請を行っている
- 宮崎県**

◎連載を終えるにあたって

●この連載を始めた時は、5回位のものごとを考えていました。それが何と3年近くも続いてしまいました。

内容も、はじめに考えていた熱帯林の植生や生物的特性だけにとどまらず、気候、土壌、樹種別用途、開発輸入の歴史、そして最後には不正取引の手口にまで話が拡がりました。だが窓口が拡がりすぎて、かえって底の浅い話ばかりになってしまい、汗顔の至りというか、大いに反省しております。

いずれ機会があれば、もっと掘り下げた話を考えてみたいと思います。

■何故不正が起こったのか

連載の最後のパートで、木材（丸太）の不正取引の実態を、フィリピンでの実例を挙げて紹介しました。これは、同国が日本にとって、何につけても南洋材開発輸入の見本みたいな国であったし、不正もまた、ありとあらゆるケースが行われていたからです。

何故そのようなことが起こったのでしょうか。フィリピンでは1960年代半ばから、木材資源枯渇を理由に、伐採と原木輸出規制を執行するという政府の意向が何回となく表明されました。

しかしそれらは結局、地元木材業界の反対陳情によって、いつもお流れになってしまうのが常でした。その有力木材業者の大統領に対する陳情が、単に言葉だ

けの陳情だったとは考えられません。

また、それだけではありませんでした。規制のニュースが流れる度に日本商社が買付けに走り、価格も上がってラワンマーケットはタイトになり、現地ロガーの発言力も一時的にせよ強まる訳です。

そして何よりも、そうした情報操作をすることによって最も潤ったのが、外ならぬ大統領自身だったのです。規制をチラつかせて木材価格を上げる一方、正規の伐採、輸出のライセンスの他に、大統領の特別ライセンスの枠をどんどん広げてゆきました。これは天然資源省や林務局による通常のライセンスとは違い、大統領が全く恣意的に発行するものです。

マルコス大統領は、値上がりした丸太の特別ライセンスを、自分の信任している將軍たち、側近の大臣等にボーナス代わりに与えました。貰う方も、何を貰うよりも喜びました。右から左へ換金でき、しかも大層なプレミアム付きで転売できたからです。

その他にも、ミンダナオ島のゲリラ討伐で功績のあった軍人、たまたま飛行中にゲリラ向けの武器密輸船を発見した民間パイロット、色々な意味で大統領に協力した地方の有力者等々、あらゆる階層へ報償金代わりに与えられました。つまり大統領は、自分の腹を痛めることなく、体制固めに役立てていたのです。

だから前に書いたように、丸太を売り

込みに来るブローカーは、500 ㎡や800 ㎡といったごく小口のライセンスをつぎはぎして、一隻の船積量の半分や7割分などを工面して商売していました。そして高いプレミアムを取り返すためには通常取引の儲けだけでは間に合わないので、5割増しとか倍とかの量を船積みしていた訳です。

誰が儲けたのか

ですから誰が儲けたのかと言えば、まず疑いもなく特別ライセンスを発給し続けた大統領自身でしょう。単に報償の意味で出されただけではなく、本来輸出が禁止されている樹種についても大量に発給された例もあります。そうしたケースでは、逆に発給を受けたシッパーから大統領に代償が流れる訳で、その額は莫大だった筈です。

こうした背景があって、シッパーたちは低価申告や過大積込み、樹種の誤魔化し等、ありとあらゆることをやっていました。しかし前にも述べた如く、日本の輸入者は、L/C記載事項から通関、手形決済に至るまで正規の取引形態を取っておりましたから、どこにも不正の影を認めることはできませんでした。

だがしかし、輸出申告額や船積地での手形決済額は明らかに実際と異なっています。差額には必ず裏決済が伴い、その差額はフィリピンには落ちず、外地にあるチャイニーズシッパーの口座に流れて行ったのです。

本来この金は、跡地植林をはじめ、資源輸出国内で再投資に廻され、国民の経済水準の向上のために活用されるべきも

のだったのです。それが大統領であれ、木材業者であれ、とにかく個人の蓄財のために外国で溜め込まれたのですから、貧乏な途上国としては、貴重な一次産品を切り売りしてその正しい見返りを得られず、ただ自然破壊を悪化させただけという結果になってしまった訳です。

こうした事情は、フィリピンだけでなく、サバでもインドネシアでもパプアニューギニアでも大同小異でした。第2次大戦終結という外的要因によって産業基盤ができていないまま国際社会へ参加した途上国にあっては、過渡的な現象ではあったにせよ、本来その国に入るべき貴重な外貨代金が、虚しく個人の懐中に入ってしまったということです。2度と戻らぬ天然資源の枯渇や破壊された環境を考える時、こうした個人の過去の責任を問うこともさることながら、アジェンダ21をはじめとするSDの将来について大きな反省材料とすべきだと思います。

誰が問題なのか —— 将来への視点

連載の途中で書いたように、日本人は熱帯多雨林を伐採しても、すぐ元に戻ると単純に考えていました。それがそうではないと気がついたのが、遅すぎました。

ですがごく最近、菌根菌処理によるラワン系の樹種の造林技術も、やっと研究が緒につきはじめました。遅かったけれども、これからの努力次第でしょう。また、国や民間ベース、或いはNGOまでが熱帯造林に乗り出しています。こうした動きをどう捉えたらよいのでしょうか。

まず第一には、我々先進国が消滅、劣化させた熱帯林は、世界でも最も豊かな

種の多様性を代表する多雨林が中心だったということ、上述の植林の動きは、将来の木材資源の維持を目的とした商業造林（持続可能な森林経営）に過ぎないという認識を持つことです。

商業造林は、とにかく早く収穫したい一心で、超早生樹種による短伐期一斉造林を目指します。ですから、森林が本来持っている機能の内、最も大切な、生命の多様性などには目もくれません。こんな造林なら幾らやっても生態学的には何の意味もないと言えるでしょう。

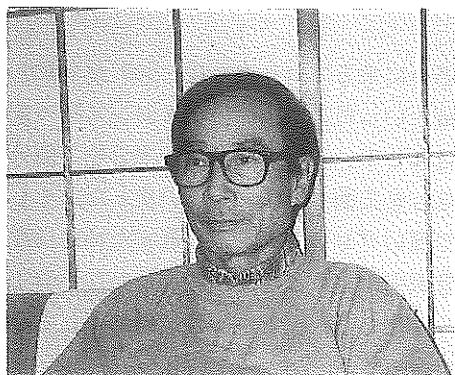
だから、人間社会の為に利用してよい森林と、人間が絶対に手を出してはならぬ自然の領域とのゾーニングを行うことこそ、焦眉の急なのです。

2番目には、人口造林つまり維持可能な森林経営には量的な限界があるということです。前号の報告の最後にも書いたように、いくらバイテクが発達しても、自然環境の中では木材資源の収穫量を無限に高めることはできません。

ですから、造林するからいくら使っても良いというのは間違いで、現在の自然条件の中で生み出せる林産物の量的限界をはっきりはじき出して、それに見合った木材消費限界量を見極めることが必要です。

3番目には、国産材の利用によって南洋材の利用を減らそうという話がありますが、これほとんどナンセンスに近い考え方です。資源利用にはそれぞれの向き不向きというものがあって、国産材と南洋材とではその向きが違うのです。

国産材は、基本的な産業構造上の欠陥により非常な苦境に追い込まれてから、20年になります。この間、南洋材の輸入量はピーク時の約半分に減りました。



△ 猪俣栄一さん

それによって国産材業界はどれだけ楽になり、国産材利用がどれだけ増えたでしょうか。数字で検討してみれば、事の真偽はすぐ明らかになります。

国産材業界が国産材の利用拡大を呼びかけるのは、熱帯林保護思想とは全く無縁の動機によるものですし、また国産材を圧迫している敵は米材、北洋材であって、南洋材ではありません。それに国産材の苦境の原因は造林方法やサプライの能力不足等、基本的な構造上の問題に起因しているのであって、どう考えても南洋材とのつながりは見えてきません。

だから連載の中でも強調したように、人の話を鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考えてください。私はそのための材料をこの連載で提供したかったのです。

最後に、熱帯林を守る目的は何なのかという問い掛けを常に忘れないでください。ただし、人間の幸せのためにというのであれば、それは一部の木材業者のためにというのと大した違いはないでしょう。では、何のために？ その辺りもご自分で考えてみてください。そのためにこの連載がお役に立てれば幸甚です。

長い間のご愛読(?)に感謝して、連載を終わります。

〔おわり〕

カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて

◆黒田洋一(熱帯林行動ネットワーク事務局長)

《ミッド・コーストを訪ねて》

滞在先のニューデンバーでお世話になった
コリーン・マクロリーさんは、ブリティッシュ
・コロンビア州(以下BC州と略す)のみならず
北部カナダの亜寒帯林地帯の先住民に大規模
伐採が来ることを知らせて歩き、「北のブラジ
ル」カナダの問題を世界に知らせました。10
月の始めに熊学者で、彼女のお兄さんのウェ
インが組んだミッドコースト(BC州沿岸中央
部)地域のロイヤル・プリンセス島への熊ツ
アーに誘われました。

ここは雨量が多く、豊かな原生林に覆われ
ていますが、農地に適さず、人間の居住には
厳しい土地です。漁労などを行う少数の先住
民社会が点在するだけで、道路も限られ、人
間活動の影響がわずかなために野生動物の宝
庫となっています。しかしこれまで、伐採の
中心だったバンクーバー島の原生林が減少し
、保護運動も活発化するにつれ、都会から隔
絶したこの地域にも森林伐採が忍び寄ってい
ます。

この地域で最も活発な製材大手のインター
フォー社は、1980年代に東京に進出し、日
本向け輸出で巨大化した木材会社で、保護
団体の標的になっている。ウェインは、NH
Kの「地球大紀行」取材チーム(最近放映さ
れた)を案内するために、すでに島の付近に
停泊する自家用船スピリット・ベア号に滞
在していて、私は後からバンクーバーのフィ
ルム・クルー3人と一緒に、小型飛行機を2
回乗りついで合流しました。

ホバークラフトが着水すると、トム・アリ
ソンという冒険家が運行するオーシャン・ラ
イト号というカヌーやカヤックを搭載した探
検用の豪華船が待っており、そこを拠点とす



△ クリフトウの先住民村でウェインとデビットら
クマ保護区事業の調査STAFF.

る5日間の無人島ツアーが始まりました。ソ
ムディアック(ゴムボート)で島に到着する
と、コモディ・ベア(白いクロクマ)が私
たちをさっそく出迎えました。今は鮭の産卵
シーズンで、彼らは鮭を食べては昼寝する
という毎日を送っています。鮭の大集団の
多くはすでに遡上した後で、両岸には産卵
を終えて上流から流されてくる鮭の喰い
残しが散乱していた。彼らはまだ人間を
恐れておらず、信じられないほどの至近
距離(4~5メートル)まで近づいてき
ました。トムやウェインはもっと慣れて
おり、カヤックなどで近づいて、2メ
ートルの距離でクマの昼寝を見ていた。
BC州のある写真家はクマに触れること
ができるという。

オーシャン・ライト号では近くで操業
するベトナム移民の漁船からもらった新
鮮な蟹に舌づつみをうち、ワイングラス
を傾けて、カムチャッカでヒグマに襲
われて亡くなった写真家の星野氏のこ
となど、熊談義は尽きない。今、BC
州ではクマの狩猟禁止住民投票運動
など保護気運が高まっている。

クマ・ウォッチングでは、ソムディアックで無人島に上陸し、河口を遡って川岸でクマが現われるのを待つ。海岸に来ていることもある。水に腰までつかるので、ヒップ・ウェイダーなど全身完全防水体制でのぞむ。クマの食べ残しをねらうハゲワシやカラスなどの鳥たちが空を舞っている。毎日のようにクマたちが現われたが、最終日には例の白いスピリット・ベアを河口の葦の中で川水につかりながら待った。

するとクマが現われ、私たちに近づいてくる。のそりのそり、ついにカメラの4~5メートルまで接近。雨天で薄暗く、私のオートマチックではフラッシュが光るのでカメラに納められなかったのは残念。本当に私たちが襲わないのか、手から汗がジト一つとにじみ出る。にらみ合いが続く。クマは私たちのことがどんな風に見えているのだろうか？ 緊張の一瞬、クマは横を向き、あつという間にしげみに姿を消した。まるでお別れの儀式のようだった。



△ 美しいベラクーラの町



△ ベラクーラのボトウツケにマ

《先住民の村へ》

クマの楽園に別れを告げ、ウェインのボートで帰路につく。荒天の中、無数の島の間を縫って、快スピードで進む。ウェインの車が止めてある沿岸の町ベラクーラまで2日間の船旅。暗くなり先住民の住む島へ寄港する。クラムトゥの町だ。

ウェインはこの地域のクマ保護づくりのために、10年以上活動している。そのため提案されている保護区内の伐採は数年前から一応止まっている。島の宿泊所にはウェインのプロジェクトの一環として、この島の先住民との共同事業のための調査にきているデビットらと再び会う。

先住民との協力関係をつくるのが、事業の成功の条件だ。伐採会社などに丸め込まれたら、保護区づくりは困難になる。住民の経済や文化を守り、自然保護区と共存するための新しい村づくりを考え、失われつつある先住民文化を今に生かす道を探っている。

カナダはアパルトヘイトの発祥地だという。多くの先住民は伝統文化を否定され、経済基盤を奪われて居留地に押し込められ、政府の福祉政策に依存する悲惨な生活を送っている人々が多い。子どもたちは民族の言葉や誇りを失って、麻薬やアルコール漬けとなり、人々は民族再興のため闘っている。デビットさんはこの春、先住民と木の文化に関する研究をまとめて本を出すことになっている。

くまの 熊野から 『春の編』

◎中村 義明
Yoshiaki Nakamura

△初春の想い△

1997年の正月は、暖かい穏やかな気候に恵まれた。我が家も熊野で8回目の新年を祝った。地元の風習に習って、我が家でも椎の若木の門松を立てた。元旦には車で篠尾の山へ登り、初日の出を拝んだ。

篠尾の山は高く、見晴らしがとても良い。西から東へかけて、果無（はてなし）山脈から西牟の山々、野竹法師や日置川（ひきがわ）奥の法師山、大塔山、那智の山々、三重県の南牟の山々まで見渡せる。熊野の山並みが幾重にも重なり連なっている光景は、素晴らしい。

山から下り、村の神社にお参りする。我が家では毎年、本宮大社へも初詣に出かける。本宮大社は私たち夫婦にとって、未だ住む家も見つからぬ前に熊野に住むと決めて結婚式を挙げた、ご縁の深い神社である。初詣の度に、熊野に暮らせること、山仕事のできることの有難さに感謝し、想いを新たにすのだ。

△ストーブの楽しみ△

山里篠尾は冬の寒さが厳しい。私たちは廃校に住んでいるので、部屋が大きい。

暖房も、石油ストーブなどではとても間に合わない。

最初の冬に信州から鋳物の薪ストーブを取り寄せた。欧米のストーブのイミテーションで台湾製であるが、安くても充分役に立つ。耐火ガラスの窓があり、燃える火が見える。

火を焚くのはなかなか楽しいものだ。小学校1年生の息子、明（あかる）もストーブで薪を燃やせるようになった。ストーブで部屋が暖まり、燃える火を眺めていると、体も心もほぐれて安らいでくる。冬の楽しみのひとつである。

寒い山で働いて家へ帰り、風呂で冷えた体を温め、ストーブを焚いた部屋で晩酌をすると、一日の疲れを忘れる。篠尾の特産であるこんにゃくをさしみで頂いたり、さんまの丸干しやなれ寿司を肴に一杯やるのは、熊野ならではの冬場の楽しみだ。時にはしし肉や鹿肉を頂いて、しし鍋や鹿さしの御馳走が食卓に上ることもある。山や海の豊かな恵みに感謝して、つつい酒が進んでしまうことになるのだ。



篠尾の山から見える幾重にも重なる熊野の山並

△初めての山見△

正月2日、私は山ぶとになって初めて山見(やまみ)に行った。山見というのは、山主が自分の山を見て廻り、境界を確認し、山ぶとと山をどう手入れしていくか相談したりするのである。山主と先輩の山ぶとである岡さんと私の3人で、朝8時頃に出発し、昼過ぎに帰ってきた。

山の境界は分かりにくく、3年毎位に山見をしなければ分からなくなってしまうかねない。山主が亡くなり子どもが都会へ出てしまった場合など、自分の山がどこまでなのか分からなくなってしまうこともある。

山見もせず手入れもされることなく放置された山も多い。植林した山は手入れをしなければ荒れてゆき、環境破壊となってしまう。

代が替わって手入れもできない山は町が買い取って管理し、杉檜を伐出した後は広葉樹を植林するか自然林に戻して環境を守っていくようにしたいものだ。

△消防団に入団△

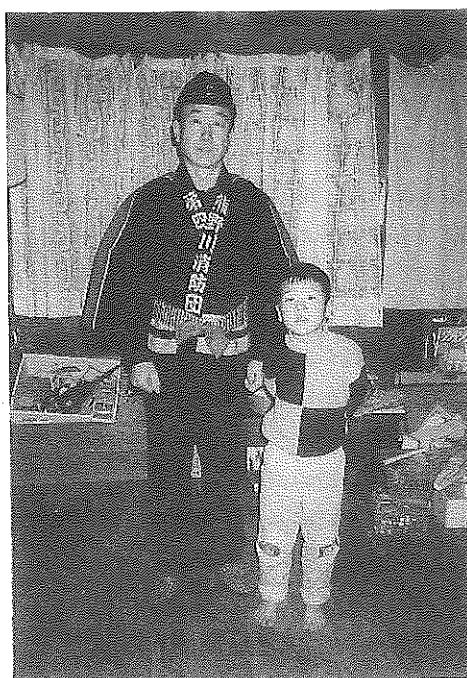
地元で山ぶととして働くようになってから、隣の本宮町森林組合で働いていた時よりも地元熊野川町との関わりが深くなってきた。

今年1月1日付で、私は熊野川町消防団に入団した。高齢化の進む町では消防団員も年配の人が多し。40代とはいえ若手の入団は歓迎される。災害から町民を守るのは、若い者が担う仕事だ。

1月4日には新入団員として初めて出初式に参加した。熊野川の川原での一斉放水では、放水銃を持つ同じ篠尾の寺代さん(50代)の助手を勤めた。水しぶきでびしょぬれになったが、とても爽やかな気分になった。

村を見下ろす山で働いているので、火

災を知らせるサイレンが鳴ればすぐ出動できる。またひとつ地元のお役に立てることができて、嬉しい。



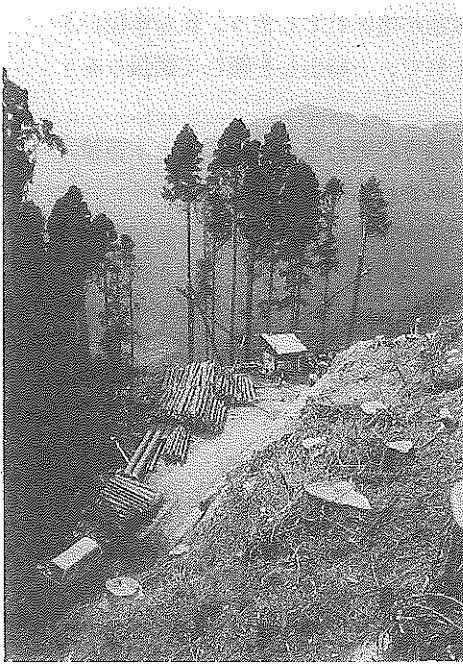
△消防団に入りました。息子とポーズ。

△山で感じる春の気配△

昨年の8月から始まった今回の伐出作業は、林道の下の部分の伐出に移って2ヵ月を越えた。林道から下は立っている場所が悪く、作業は危険で時間もかかる。

今はとんがけは山仕事40年のベテランである和田さんの兄さんがやり、私は和田さんと一緒に土場で丈取り(たけとり、山から土場へ架線を出した木を3m、4m、6mなど一番良い本取りになるように寸法取りすること)をし、天切りし、フォークリフトで積んでいく作業をしている。集材機の運転は、73歳の古根川さんである。

この冬は1月の半ば過ぎから寒さが厳しく、積雪のため土場まで行くこともできず、出しの作業が1ヵ月程ストップした。山で働くのが好きな私たちにとって、長い間仕事ができないのはつらい。また



その間は収入もない訳で、経済的にもつらい。

積雪の中をどうにか土場まで行けるようになってから、和田さんと2人で残った木を伐りに1週間ほど雪山へ通った。伐りの最後の日は強風とともに雪が叩きつけ、危険な作業となった。これで伐りはほとんど終わり、あとは出すだけだ。

山へ入れない間、里で道路を拡張する現場の木を伐る仕事があり、暖かい場所で5日程働くことができた。土木仕事の現場で木を伐る仕事も時々ある。

2月の半ばになってようやく、ほぼ1ヵ月ぶりに4人のメンバーが集まり、出しの作業を再開した。久しぶりの出しである。やはり仕事ができるのは嬉しい。有難い。

土場には寒風を避けるために簡単な小屋を作っている。その中にドラム缶を置いて、火を焚き暖を取るのである。毎朝、山へ来ると、まず火を焚き湯を沸かす。湯が沸くまで、チェーンソーの手入れをしたり、集材木やフォークリフトの準備をする。湯が沸くとコーヒーを淹れて、

四方山の話に興じるのだ。そしてまた、一日の仕事が始まる。

出しの仕事が再開してからも時折寒さが振り返すこともあったが、次第に雪が雨に変わり、一雨ごとに暖かくなってきた。厳しい寒さの中で頑張ってきた私たちにとって、春の訪れは待ち遠しい。うぐいすの鳴くのを初めて聞いた時など、春が来た喜びを体中で感じるのだ。

△豊かな森を取り戻したい△

里ではふきのとうが出てきた。ふきのとうは山菜の一番手である。きざんで汁に浮かせたり、さっと湯がいて酢味噌で食べたりして、早春のほろ苦い味を楽しむ。

我が家では、しいたけの楢木（ほだぎ）を置いている。コナラなどの木を伐って種駒菌を打ち、仮伏せのあと本伏せすれば、春と秋にしいたけができる。

去年から柴をかぶせて仮伏せしておりた楢木に大きな肉厚のしいたけができていたのを、おばさんが見つけてくれた。寒い時期には肉厚の寒子（かんこ）ができるが、こんな大きく立派な寒子は初めてである。おばさんにも分けてあげて、我が家でもその晩早速頂いた。とれたてのしいたけを焼いて食べると、実にうまい。暖かくなれば次々と春子（はるこ）が出てくるだろう。

楽しみにしているとおばさんが、「猿がしいたけの芽を皆もいでしもたわよ」と言う。隣の犬が死んでから、猿が家の裏まで来るようになったのだ。楢木を網で囲ってやらねばならない。困ったものだが、猿も山に食べる物が少なくて、里まで出てくるのである。

広葉樹の樹林や自然林の復活を、実現していかなければならない。里でも耕作を辞めた田畑や草刈場だった所に杉檜が植林し

であるが、里のすぐ側まで杉檜がうっそうとしてくると狭苦しく息苦しい。山菜やきのこや木の実の採れる、明るい雑木の里山を復活させたいものだ。

これからたらの芽やわらび、ぜんまい、ごんばち（いたどり）など、山菜の季節となる。豊かな山の恵みを楽しむためには、豊かな森を取り戻さねばならない。

今、篠尾の置栖さんたち森林組作業班は、杉檜を伐出したあとの3町歩の町有林に84本のケヤキを植林している。篠尾の町有林にも、4、5年前にクヌギとケヤキを植林した。町が広葉樹を植林するようになってきたのは良いことだ。どんどん拡げていきたいものだ。

和田さんも熊野古道に桜を植えた。私もお手伝いをさせてもらった。

我が家でも、校庭に梅、栗、柿、すもも、りんご、くるみなどの果樹を植えた。豊かな実りを楽しみに、世話してゆきたい。



▷防鹿ネットを張った山

△山にも春が来る△

山仕事の現場では、林道から上の部分は伐出しのあと、先輩の山ぶと岡さんが礼子さん（60代）と一緒に地あらしをした。厳しい寒さの中での作業は大変だったろう。

地あらしを終えると、廻りを網で囲う。鹿やかもしかやうさぎが入らないようにするためだ。昔は網を張ることなど必要

なかったが、今ではそうしなければ植えた木苗が喰われてしまう。私も手伝いを頼まれて、一時出しを離れて網張りをする。

網張りが終わると、いよいよ木苗植えが始まる。山にも春が来る。



▷植林作業

△初牛のお祭り△

3月5日は、村のお稲荷さんの初牛のお祭りがあった。

朝、山仕事へ行く前に、神社に幟を立て幕を飾って準備をした。昼で仕事をおき、山を下りると急いで昼食を済ませ、御供の御酒を持って神社へ行く。もう皆あらかた集まっている。平日なので新宮市に出ている子どもさんやお孫さんも帰ってこず、人数は多くはない。

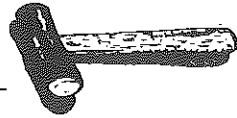
簡素な祭礼の後、御酒を頂くと御供（餅）まきだ。放り投げられる御供を、我先に拾う。遠慮はいらない。奪い合うようにして、御供拾いに興じるのだ。

このお稲荷さんのお祭りは、私たち夫婦には思い出がある。8年前、私たちが篠尾の廃校を借りる時、村全員の面接試験をこのお祭りの時に受けたのである。皆の前でなぜこの村の廃校に住みたいのかを話し、村人の合格判定を頂いたお蔭で、今日の私たちがある訳だ。

子どもも授かり、地元の山ぶとになり、村の一員として根を下ろしてきたこの8年。早いものだ。これからもしっかき根を張って、働いてゆきたい。

{つづく}

つくり手からの『家具』のお話



◆ 水田 健一 [別注家具制作・ZOO]

◎ その4 「製造(接合)」のこと

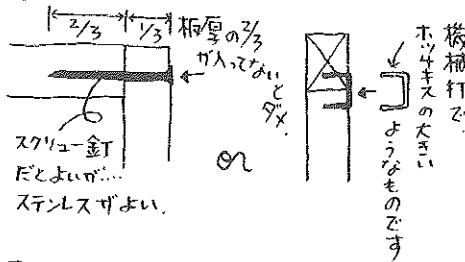
前号で家具の値段のつけ方を書きましたが、どんなものにもそれに見合う値段がつけられています。

反対にいうと安いものにはそれに見合う作り方がされているということです。

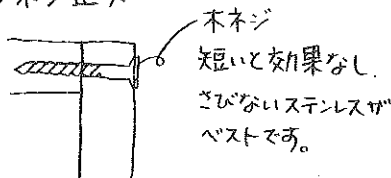
それでは、町にならんである安い家具はどんなつくりになっているのでしょうか？

接合方法に釘打ち、ネジ止め、タボ接合などがあります。

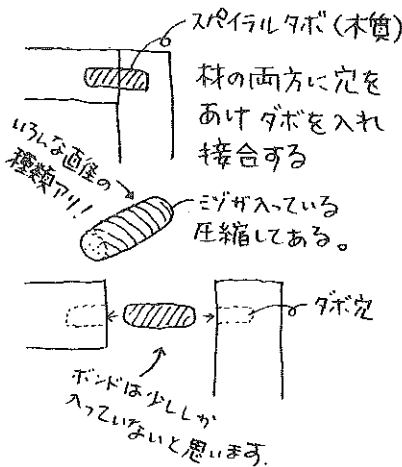
① 釘打ち(又はステップル)



② ネジ止め



③ タボ接合



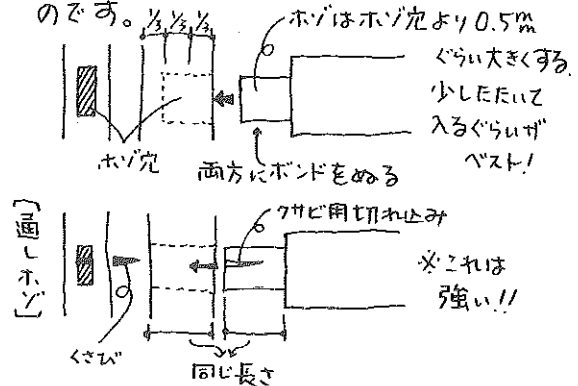
これらは加工が容易で素人にもできる作業でコストもグンとおちるため多く使われています。

接合面にはボンドが入りませぬ、さ取りなど手回を少なくするため少ししか入っていません。

組立て家具には雄ネジと雌ネジを使っています。(金具の発産にともない多く使われています。)

又、高級な家具にもタボ接合が多く見られるのはちと大変です。

これに対して私のつくるものは、ホゾとホゾ穴で接合する伝統的なもので木のしまりとボンドをつかったものです。



釘と木ネジを木に入れると長い向に木の水分などにより、さびたりするためそこからゆるみが発生する。

異質なものなるべく入れない方が良いでしょう。又、ムクの材であれば釘や木ネジもよく効きますがパーティクルボードや合板はあまり効きません。木の持つ特性を生かすが一番です。 [つづく]

ウータンへのお便りから…… (一部略・敬称略)

- *がんばってますか。 熊本県 井上智
- *名古屋では、愛知万博反対と木曾川上流の岐阜県御崇町に計画されている巨大産廃処分場反対とで大忙しです。 名古屋市 大沼淳一
- * 昨年熱帯林連続講座に参加しました。
日本林業の衰退と熱帯林の破壊、(中略)私には一体何ができるんだろう……何かしなくては、と思っています。 神戸市 小田詩世
- * 結成10年おめでとう(?) ございます(中略)私も初心を忘れずがんばりたいと思います。 広島市 北本一郎
- * (前略) 生協活動を通じてのフィリピンのネグロス島のバナナ生産者の人々との交流で、現地において会うということの重要性がわかってきました。ウータンとサラワクの人々の交流にバンザイ。
松原市 小森富美枝
- <川柳> 破防法存在自体が「ノオ」なるぞ/元金の保証銀行よりタンス
「住専」と仮設の間も大断層/車とは美女の姿でバラのトゲ
救済金ある時払いの催促なし/油処理住専並みの尻ぬぐい
五十万犠牲の車が進歩とは/成人の晴れ着親への領収書
オウムとて維持法まねぬ破防法/エゴ国家地球市民はるかなり
(他にもたくさんいただいております) 北阪英一
- * いつも楽しい表紙で感心しています。捨てることに痛みを感じる感性が
どんどん喪失しているように思えます。森を育んだり、家具を大事に使っ
たり作り出す運動が、これから大事なのかもしれません。
大阪市 畑 章夫
- * 頑張ってください。私たちも8年になりました。
熱帯林保護団体 南 研子
- * 時代は追い風です。PR活動が花咲く時が来たように思います。
更に前進を! 伊丹市 麦島貴美子
- * 読んでもわからないところもいっぱいあるけど、せめて読みつづきたい
と思っています。 茨木市 森石香織
- * 旧年中はダム・ダム・ダムで明け暮れたような気がします。『三峡ダム』(築地書館)の翻訳は、昨年九月にようやく出版に漕ぎつけました。
ペルー人質事件では、橋本首相と日本企業は、テロがけしからんと息巻
いていますが、構造的暴力を振おうとする独裁政権に資金的「援助」を
行うことは「経済テロ」なのでないでしょうか?三峡ダムでは百万人以上
の住民の生活基盤を奪うのに手を貸すのですから、これも「経済テロ」
です。本年は天野礼子氏との共著『三峡ダムとダムマフィアたち』の執
筆にとりかかりました。 鷲見一夫
- * 熊野の中村さんが小豆島にいた頃、何度かお逢いしたことがあります。
なつかしく、山からの便り拝読させて頂いております。 山田睦美
- ◇ これからもウータン紙上でどんどんご紹介しますのでどうぞ 貴望を
お寄せ下さいませ…… もちろん 批判も可。 ヨロシクッ!

芦屋のゴミを考える会・山田園子 荒川純太郎 井口博 伊東万千子
 井上智 井上真 猪俣栄一 岩崎純子 上田真弓 馬谷憲親 Ms 建
 築設計事務所・三澤文子 太田静賀 太田敏一 大西裕子 大沼淳一
 岡崎純みよ グループ地球人・岡本昭子 奥村知亜子 小田詩世
 越智清光 加賀寿子 加藤昌彦 鏑木里子 河添純子 北本一郎
 北阪英一 児玉かずみ 小吹岳志 小堀直子 小森富美枝 汐見文隆
 志儀真由美 助友伸子 関良基 田岡めぐみ 高橋敬一 津田妍子
 苗村真代 成岡卓翁 西村久美子 橋本彩子 畑章夫 平野誠 藤
 村はるえ 二木洋子 溝口正美 南研子 麦島貴美子 明周正和 森
 石香織 山川信恵 山口八千代 山崎大 山田光一 山田睦美 横川
 修 米川誠一 ロシナンテ社・四方修

◎ 皆さん、ありがとうございました！

いろんな団体にカンパしておられる方もおありで、大変だと思
 いますが、今年度の会費がまだの方、よろしく願いいたし
 ます。大切につかわせていただきます。

また、裏返し封筒もよろしく願いしま〜す！

ほんまに、「おめでたい」とも言いにくい10周年、「昔ウータンと
 いう、けったいなグループがあったとき」と言える日よ、早くこい！

96年会計報告と97年予算案

96年会計報告 (収入)

繰越し	399,231
会費 a 300x150	450,000
学習会参加費 a 800	20,640
カンパ(*)	262,240
講師謝礼	17,000
物品販売、パネル貸出し	100,460
計	1,249,571

*カンパ・パタゴニアストアより
 20万円寄付有りパネル製作

(支出)

会報・チラシ製作費	223,010
送料	171,280
家賃 a 12000x12ヶ月	144,000
販売物品原価仕入(Tシャツ等)	100,000
パネル製作費・絵はがき印刷	252,344
学習会講師謝礼・会場費	56,120
学習会とよなか補填分	17,242
雑費	21,708
繰越し	263,867
計	1,249,571円

97年予算案

(収入)

繰越し	263,867
会費、カンパなど	630,000
物品販売・パネル貸料等	200,000
学習会参加費	72,000
計	1,165,867円

(支出)

通信、チラシ製作・発送費	450,100
家賃 a 12,000x12ヶ月	144,000
販売物品原価仕入(Tシャツ等)	110,000
会場費	80,000
リーフレット a 5x3,000部	15,000
学習会謝礼・交通費・宿泊費等	115,000
雑費	40,000
繰越し	211,867
計	1,165,867円

HUTAN ACTION SCHEDULE

97 熱帯林連続講座 PART 4

● 1980年から10年間で、世界の森林は7300万haも消失し、その後も森林の破壊は続いています。特に熱帯林の減少は大きく、年間に1540万haも減っています。東南アジアでは商業伐採による影響が大きく、乱伐が続いているため熱帯材の枯渇にもつながっています。

日本では160自治体が熱帯材の使用削減を行っているものの、この熱帯材の代替として、ロシア原生林の木材を輸入し利用が急増して、破壊が急速に始まっています。合板材は主に熱帯木材でしたが、今年はロシア材を含め針葉樹合板の使用量は約4割になると予想されています。外国の森林をまたなぎ倒すことになります。

「荒廃しつつある日本の森の有効的な活用を考える時期ではないでしょうか。日本の国土面積の4分の3が森林にもかかわらず、放置されたままです。住宅、家具などに使われている木材を見直してみましょう。国産材の有効的な活用も考えましょう。私たちに出来ることを知って、行動してみませんか。」

① 3月29日(土)Pm6:00~アピオ大阪

◇「熱帯材問題編」——私たちと熱帯林

～サラワク、パプアの熱帯林破壊を問う

講師*林達雄さん(元JVC事務局長)

荒木琢磨さん(ウータン)

② 4月19日(土)Pm6:00~アピオ大阪

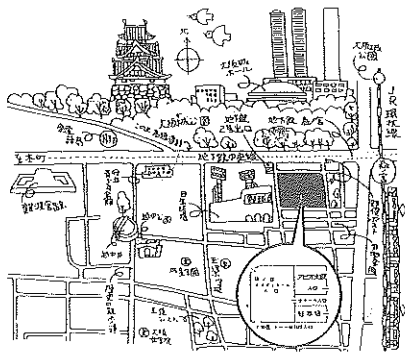
◇「亜寒帯材問題編」——ロシアの森の破壊

講師*野口栄一郎さん(地球の友)

③ 5月17日(土)Pm6:30~アピオ大阪

◇「国内材問題編」——国産材の活用を!

講師*三澤文字さん(Ms建築設計事務所)



J R: 大阪環状線「森ノ宮」下車すぐ
地下鉄: 中央線「森ノ宮」2号出口右手後ろすぐ

☺ 火曜日以外の連絡先

西岡 ☎0722(52)0505 または

荒木 ☎0722(58)6396 まで



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】 大阪市北区中崎町1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel. 06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円

【郵便振替】100930-4-3880

●購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

●ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。